

高病原性鳥インフルエンザとは

(1) 原因（病原体）

国際獣疫事務局（WOAH）が作成した診断基準により高病原性鳥インフルエンザウイルスと判定されたA型インフルエンザウイルス

元気消失



(2) 対象家きん

鶏、あひる、うずら、きじ、だちょう、ほろほろ鳥 及び七面鳥

(3) 症状・特徴

元気消失、食餌や飲水量の減少、産卵率の低下、顔の腫れ、トサカや脚の変色（紫色）、咳、鼻水、下痢。

急性例ではこれらの症状を認めず、急死する場合もある。

※人獣共通感染症：海外では、家きん等との密接接触に起因する高病原性鳥インフルエンザウイルスの人の感染及び死亡事例も報告。

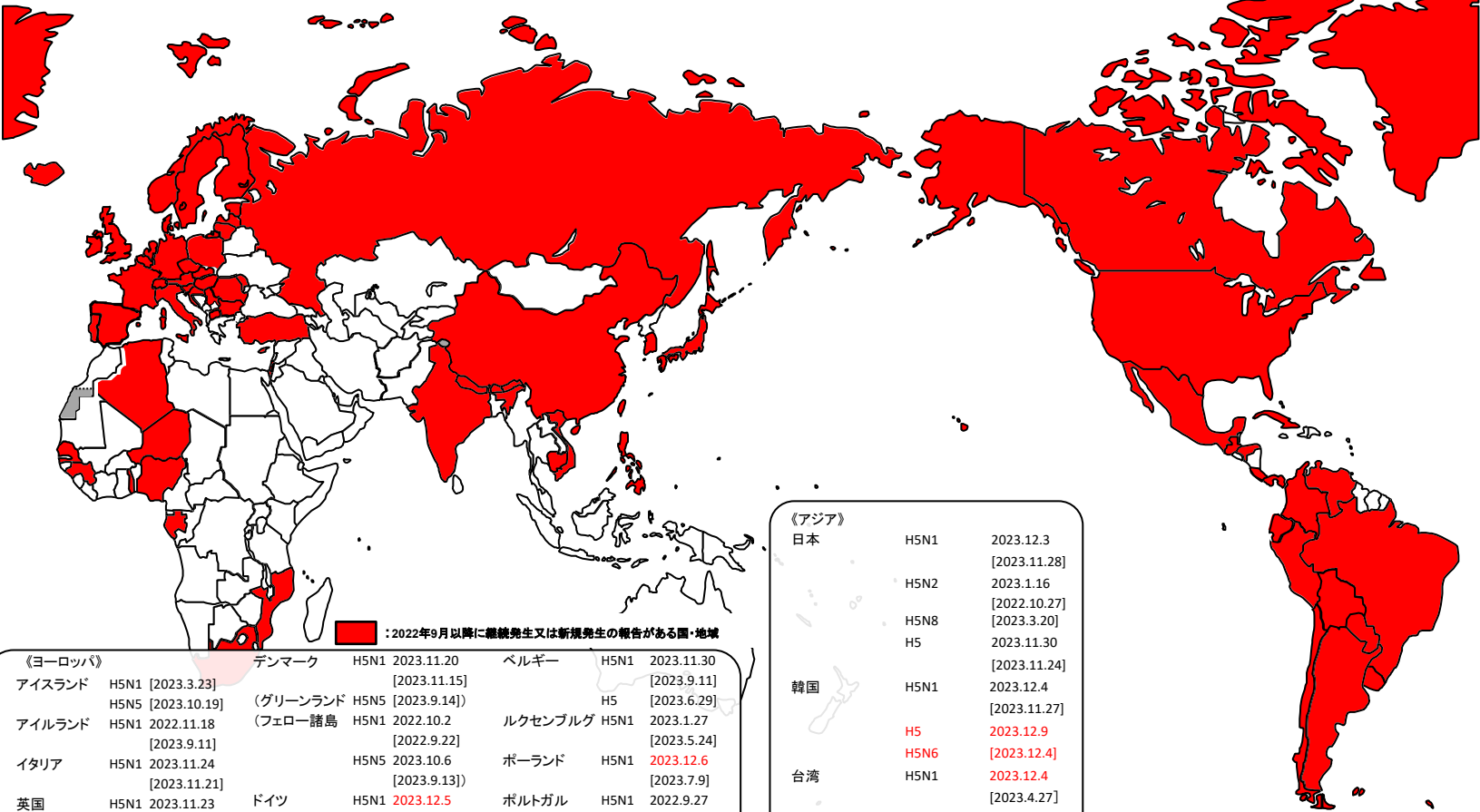
(4) 発生状況

渡り鳥により国内に持ち込まれることが多く、冬期に発生しやすい。我が国において、直近では、平成26、28、29、令和2、3、4、5年度に発生。

※内閣府食品安全委員会によると、「我が国の現状においては、鶏肉や鶏卵を食べることにより、鳥インフルエンザがヒトに感染する可能性はないと考える」としている。

高病原性鳥インフルエンザの発生・感染報告状況(2022年9月以降)

※WAHIS等への報告に基づく最終発生・感染報告日を記載



：2022年9月以降に継続発生又は新規発生の報告がある国・地域

《ヨーロッパ》

アイスランド	H5N1	[2023.3.23]	デンマーク	H5N1	2023.11.20	ベルギー	H5N1	2023.11.30
H5N5	[2023.10.19]		(グリーンランド	H5N5	[2023.9.14])		H5	[2023.9.11]
アイルランド	H5N1	2022.11.18	(フェロー諸島	H5N1	2022.10.2	ルクセンブルグ	H5N1	2023.1.27
		[2023.9.11]			[2022.9.22]			[2023.5.24]
イタリア	H5N1	2023.11.24		H5N5	2023.10.6	ポーランド	H5N1	2023.12.6
		[2023.11.21]			[2023.9.13])			[2023.7.9]
英国	H5N1	2023.11.23	ドイツ	H5N1	2023.12.5	ポルトガル	H5N1	2022.9.27
		[2023.11.26]			[2023.12.4]			[2023.11.13]
オランダ	H5N5	[2023.11.3]	ノルウェー	H5N1	2023.10.06	レユニオン	H5N1	2023.7.4
	H5N1	[2023.11.14]			[2023.9.6]	ルーマニア	H5N1	2023.10.30
		[2023.11.24]		H5N5	[2023.11.12]			[2023.11.23]
北マケドニア	H5N1	[2023.11.3]		H5	[2023.10.30]	チェコ	H5N1	2023.5.12
スイス	H5N1	2023.3.19	ハンガリー	H5N1	2023.12.6			[2023.7.17]
		[2023.7.5]			[2023.11.25]	オーストリア	H5N1	2023.1.30
スウェーデン	H5N1	2023.6.25	フィンランド	H5N1	[2023.11.1]			[2023.11.20]
		[2023.11.2]		H5	[2023.5.22]	スロバキア	H5N1	2023.1.31
	H5	[2023.7.18]		H5N5	[2022.9.17]			[2023.1.31]
スペイン	H5N1	2023.2.4	フランス	H5N1	2023.7.10	キプロス	H5N1	2023.11.24
		[2023.11.2]			[2023.10.27]			[2022.11.28]
スロベニア	H5N1	2023.2.24		H5	2023.11.26	トルコ	H5N1	2023.2.23
		[2023.11.19]	ブルガリア	H5	2023.11.27	エストニア	H5N1	2023.2.15
セルビア	H5N1	[2023.11.25]		H5N1	2023.3.30			[2023.8.2]
クロアチア	H5N1	2023.11.14		不明	2022.10.20	リトアニア	H5N1	2023.3.16
								[2023.7.3]
						ラトビア	H5N1	[2023.8.7]

《アジア》

日本	H5N1	2023.12.3
		[2023.11.28]
	H5N2	2023.1.16
		[2022.10.27]
	H5N8	[2023.3.20]
	H5	2023.11.30
		[2023.11.24]
韓国	H5N1	2023.12.4
		[2023.11.27]
	H5	2023.12.9
	H5N6	[2023.12.4]
台湾	H5N1	2023.12.4
		[2023.4.27]
	H5N2	2023.1.23
		[2023.1.12]
香港	H5N1	[2022.12.5]
イスラエル	H5N1	2023.12.5
		[2023.11.1]
		[2023.4.29]
フィリピン	H5N1	2023.1.4
	H5N6	2022.10.3
ベトナム	H5N1	2023.4.13
		[2023.9.5]
インド	H5N1	2023.6.3
		[2023.2.9]
ネパール	H5N1	2023.11.23
		[2023.10.8]
カンボジア	H5N1	2023.3.11
		[2023.7.28]
ブータン	H5N1	
中国	H5N1	

《ロシア・NIS諸国》

ロシア	H5N1	2023.10.19
		[2023.8.14]
(南樺太	H5N1	[2023.7.25])
モルドバ	H5N1	2023.1.19

《アフリカ》

南アフリカ共和国	H5N1	2023.1.6
		[2022.12.1]
	H5N2	2022.11.29
	H7N6	2023.11.9
	不明	2023.10.25
		[2023.8.14]
アルジェリア	H5N1	[2022.11.22]
ニジェール	H5N1	2022.12.18
ナイジェリア	H5N1	2023.8.24
セネガル	H5N1	2023.3.18
		[2023.3.8]
ギニア	H5N1	[2023.4.15]
トーゴ	H5N1	2023.6.21
モザンビーク	H7	2023.9.29

《南北アメリカ》

米国	H5N1	2023.12.2
		[2023.10.24]
	H5N4	2022.9.10
	H5	[2023.9.6]
カナダ	H5N1	2023.11.25
		[2023.7.1]
	H5N5	[2023.6.29]
	H5	[2023.6.23]
メキシコ	H5N1	2023.10.28
		[2023.10.24]
パナマ	H5N1	[2023.3.10]
エクアドル	H5N1	2023.8.17
		[2023.11.14]
コロンビア	H5N1	2023.2.20
		[2023.3.3]
	H5	2023.12.2
	不明	2023.7.19
		[2023.7.18]
ベネズエラ	H5N1	[2022.11.17]
	H5	2023.9.19
ペルー	H5	2023.9.24
		[2023.9.25]*
	不明	2023.2.20
パラグアイ	H5N1	2023.5.30
ホンジュラス	H5N1	[2023.2.22]
チリ	H5N1	2023.7.3
		[2023.7.5]
コスタリカ	H5	[2023.10.11]
ウルグアイ	H5	2023.5.11
		[2023.10.4]
グアテマラ	H5N1	[2023.1.26]
アルゼンチン	H5N1	2023.7.5
		[2023.10.17]
	H5	[2023.10.20]
ボリビア	H5N1	2023.3.20
		[2023.2.1]
キューバ	H5N1	[2023.2.4]*
ブラジル	H5N1	2023.9.12
		[2023.11.13]

* 動物園における発生
出典:WOAH等

2023年12月11日現在

※[]は野鳥及び愛玩鳥等における感染事例を示す。
※本図は感染事例の報告の有無を示したもので、
その後の清浄性確認については記載していない。
※型別に最新の発生事例を記載
※白色の国、地域であっても継続感染等により報告
されていない可能性もある。

※WAHIS:World Animal Health Information Systemとは、
WOAH(国際獣疫事務局)が提供する動物衛生情報システムである。

韓国の家きんにおける高病原性インフルエンザの発生状況 (2023年10月以降)

2023年12月10日9時時点
農林水産省動物衛生課

出典：韓国農林畜産食品部、報道情報

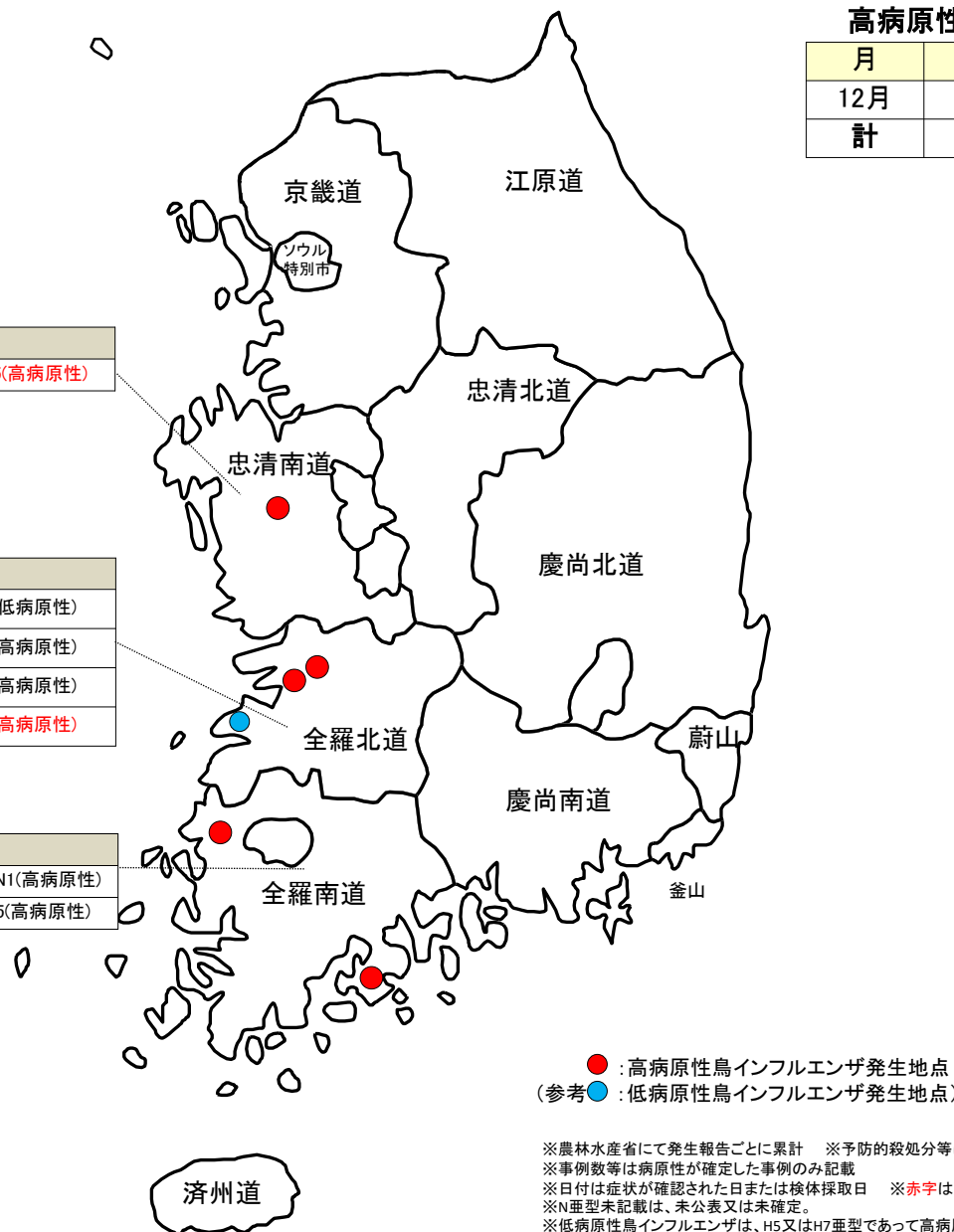
高病原性鳥インフルエンザの発生状況(確定)

月	事例数	殺処分羽数
12月	6	31.4万羽
計	6	31.4万羽

忠清南道				
2023.12.9	牙山市	採卵鶏	約3万羽	H5(高病原性)

全羅北道				
(参考) 2023.11.2	扶安郡	肉用あひる	約4.2万羽	H5(低病原性)
2023.12.6	益山市	肉用種鶏	約2.6万羽	H5(高病原性)
2023.12.6	益山市	肉用種鶏	6万羽	H5(高病原性)
2023.12.9	金堤市	採卵鶏	16万羽	H5(高病原性)

全羅南道				
2023.12.4	高興郡	肉用あひる	約2.2万羽	H5N1(高病原性)
2023.12.6	務安郡	肉用あひる	約1.6万羽	H5(高病原性)



韓国における野鳥からの高病原性鳥インフルエンザウイルスの疑い・分離事例 (2023年10月以降)

今シーズンのHPAI事例 (2023年9月から)

野鳥での初確認日

2023年11月27日(全羅北道)

家きんでの初発生日

2023年12月1日(全羅南道)

家きんでの発生数 6事例

(参考:低病原性:1事例)

昨シーズンのHPAI事例 (2022年9月から2023年5月)

野鳥での初確認日

2022年10月10日(忠清南道)

家きんでの初発生日

2022年10月17日(慶尚北道)

家きんでの発生数 75事例

慶尚北道

亀尾市 H5N1 2023.12.1

亀尾市 H5N1 2023.12.2

亀尾市 H5N1 2023.12.4

全羅北道

全州市 H5N1 2023.11.27

井邑市 H5N6 2023.12.4

2023年12月11日9時時点
農林水産省動物衛生課

出典:韓国農林畜産食品部、環境部プレスリリース、
WOAH-WAHIS、報道情報

※日付は検出日



▲ : 感染確認地点

豚熱(CSF)とは

- (1) 原因：豚熱ウイルス (classical swine fever virus)
- (2) 宿主：豚、いのしし ※人には感染しない
- (3) 分布：欧州、アジア、アフリカ、中南米の一部の国々
※ 我が国では平成30年9月に26年ぶりに発生。
飼養豚では20都県、野生イノシシでは34都府県で発生（令和5年9月1日時点）。
- (4) 症状：急性、亜急性、慢性型等多様な病態を示す。白血球減少。
※ 有効なワクチンが存在



【皮膚紫斑（しはん）】
（出典：動物衛生研究部門）

アフリカ豚熱 (ASF) とは

- (1) 原因：アフリカ豚熱ウイルス (African swine fever virus)
- (2) 宿主：豚、いのしし（ダニによっても媒介） ※人には感染しない
- (3) 分布：アフリカ、欧州の一部（ロシア及びその周辺国、東欧）のほか、平成30年8月に中国で発生（アジアで初の発生）以降、アジア地域での発生が拡大。アジアの18か国・地域で発生（令和5年9月1日時点）。
※ 日本未発生。
- (4) 症状：甚急性～不顕性まで幅広い病態を示す。
※ 豚熱に酷似するがより病原性は強い傾向。
※ ワクチン、治療法はない



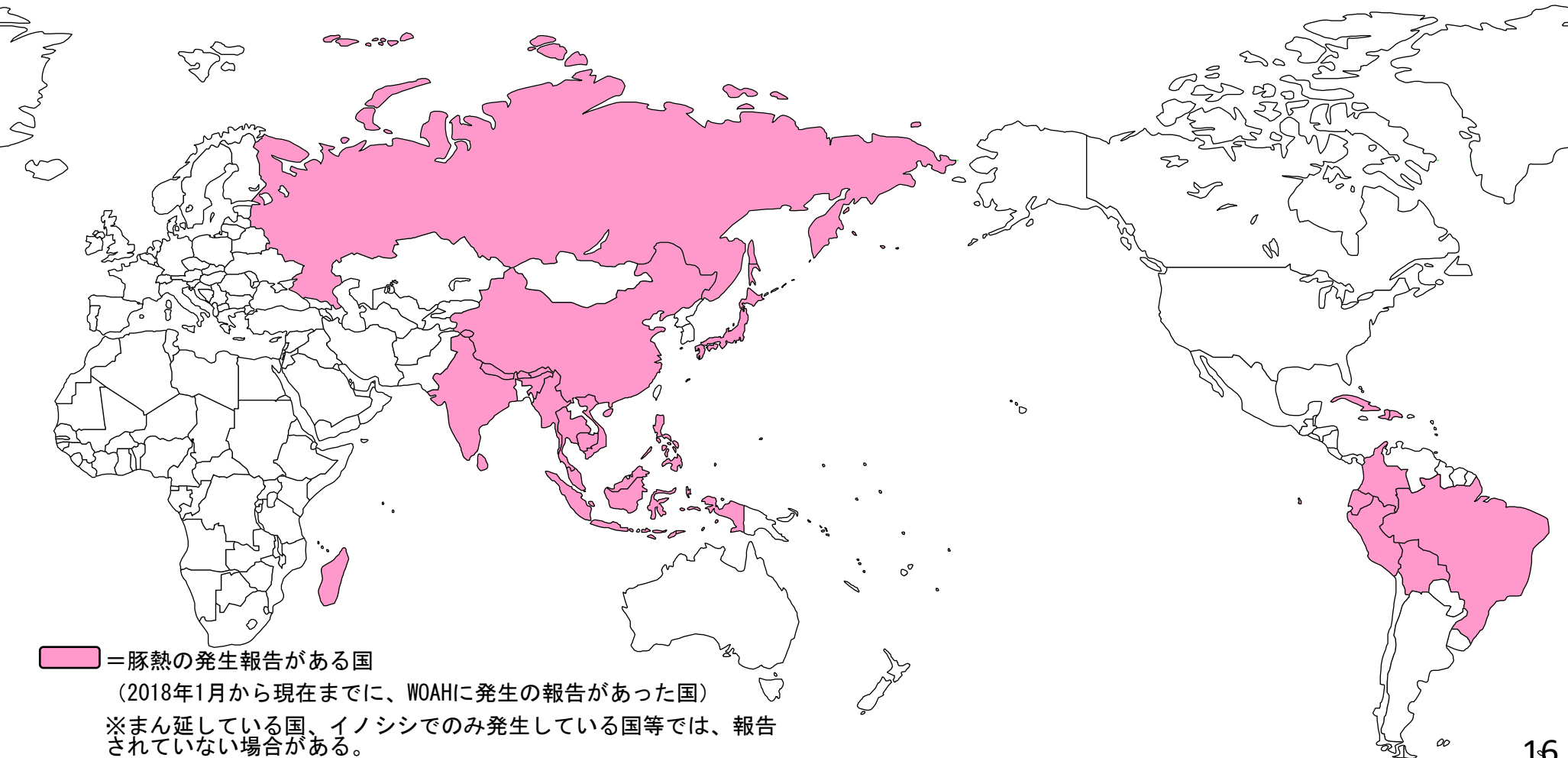
【全身の出血性病変、チアノーゼ】

（出典：Veterinary school of Barcelona, Spain
Centro de Vigilancia Sanitaria Veterinaria, Spain）

海外における豚熱の発生状況

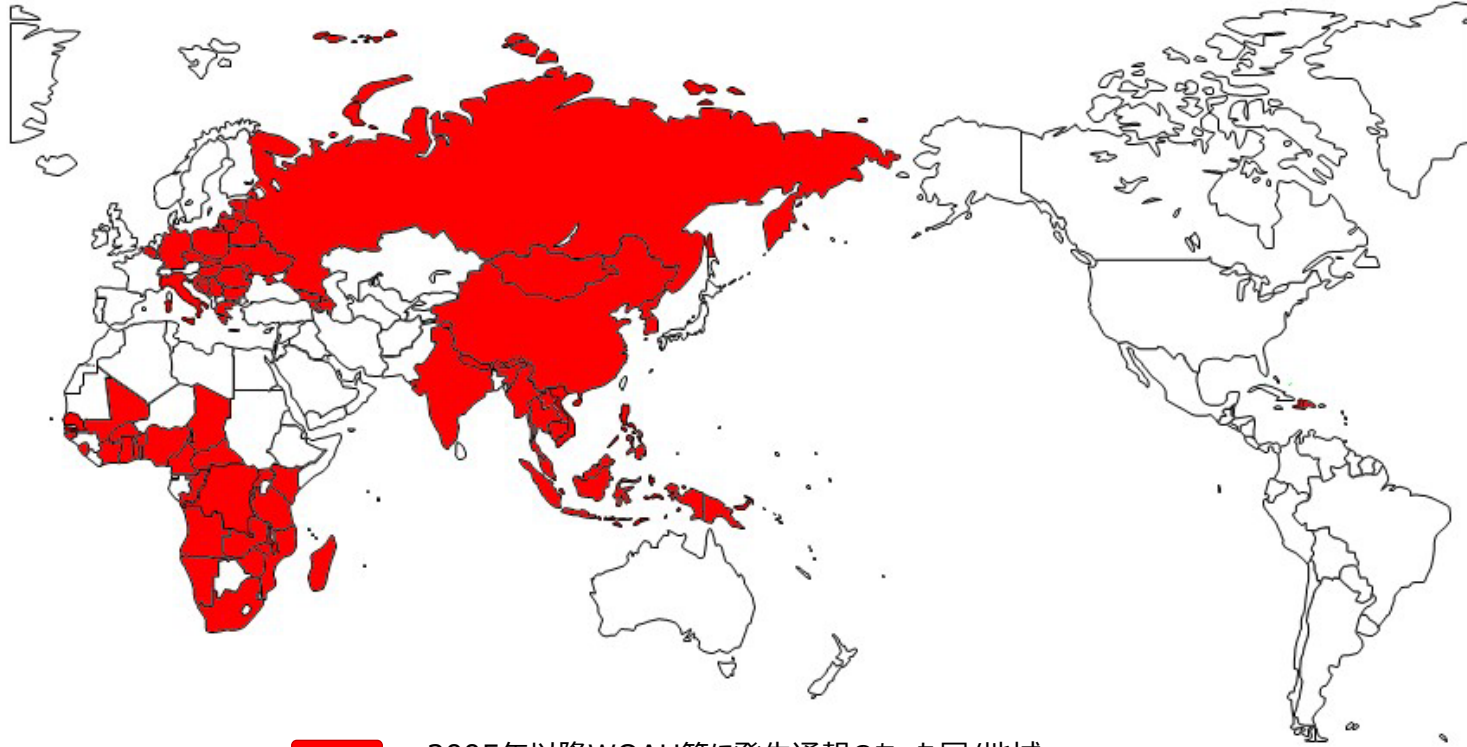
- 中国や東南アジアをはじめ、世界各国に分布。
- 北米、オーストラリア、スウェーデン等では清浄化を達成している。

令和5年6月2日現在



海外におけるアフリカ豚熱の発生状況

- 2018年8月に中国においてアジア初の発生。その後、日本、台湾を除くアジア全域に感染が拡大。特に、韓国では2019年9月の発生確認以来、飼養豚、野生イノシシで、徐々に感染が拡大。
- 2021年7月にはドミニカ共和国、9月にはハイチでの発生が確認されるなど中米にも感染が拡大。



■ = 2005年以降WOAH等に発生通報のあった国/地域
飼養豚での発生及び野生イノシシでの感染事例の報告

アジア（18か国・地域）

中国	北朝鮮	東ティモール
モンゴル	ラオス	韓国
ベトナム	フィリピン	インド
カンボジア	ミャンマー	マレーシア
香港	インドネシア	ブータン
タイ	ネパール	シンガポール

アフリカ（31か国・地域）

ヨーロッパ（24か国・地域）

南北アメリカ（2か国・地域）

オセアニア（1か国・地域）

東アジアでアフリカ豚熱が発生していないのは日本、台湾のみ。

台湾では、海岸に漂着した豚の死体からアフリカ豚熱のウイルス遺伝子が検出された事例が発生。

(1) 原因（病原体）

口蹄疫ウイルス（Foot-and-mouth disease virus）※

※7つの血清型（0, A, C, Asia 1, SAT1, SAT2, およびSAT3）があり、これらは相互にワクチン効果が得られない。
東南アジア・東アジア流行地域では0型及びA型が主に流行。

(2) 対象家畜

牛、豚、めん羊、山羊、水牛、鹿、いのしし

(3) 症状・特徴

口や蹄に水疱形成^{すいほう}、発熱^{りゅうぜん}、流涎（よだれを垂らす。）等の症状を示す。極めて感染力が強く、幼獣では高い致死率を示す。成長した家畜の死亡率は低いものの、発病後の発育障害等により、産業動物としての価値が失われる。

(4) 発生状況

中国等の近隣アジア諸国で継続的に発生しており、日本では2010年に宮崎県で10年ぶりに発生（0型）したが、翌年2011年には清浄国に復帰している。

～牛の症状～



～豚の症状～



（写真提供：宮崎県）